

保育者養成に関わる授業の特徴

よりよい教育方法を求めて

渡 辺 直 人

保育者養成に関わる授業の特徴

よりよい教育方法を求めて

The Characteristics of Classes Related to the Training of Child Care Providers

In Search of Better Educational Methods

渡辺 直人

Naoto Watanabe

要 約

本研究では、保育士養成校における授業の特徴を明らかにした。方法は保育士養成校学生を 80 名を対象とし、授業全体の感想を取得した。授業数は 33 であり、それぞれの授業で授業全体の感想を取得した。なお、倫理的配慮に基づき、回答は任意とし、同意を得た調査協力者のみ、無記名で回答を得ている。分析方法はテキストマイニングを行い、単語の頻出度、共起回数、階層的クラスタリングを求めた。

単語の頻出度、「授業」との共起回数、階層的クラスタリングの結果を概観し、授業には参加面・理解面におけるアクセシビリティが重視されているのではないかと考える。今後はバリアフリーを視座した授業の構築が求められるだろう。

目的

保育者を養成する施設を、保育者養成校と言われている。これらは厚生労働省の指定が必要で、定められた授業を履修し、実習をすることで、一般的に 2 年間の修業期間をもって保育士資格が取得できる。授業に関しては保育士養成協議会に示されているとおりである。学校は短期大学、4 年制大学、その他にも専修学校である専門学校が指定される。

一方で、現在の教育業界では授業力の向上が求められている。学校教育現場では初任者には初任研が課されることで有名だが、初任者以外にも多くの研修の機会や研究大会が存在し、それらはめぐりめぐって教育への還元、指導力の向上を目的の一つとして行っている。一方で保育者養成機関にはそのような機会は多くはない。高等教育全般に当てはまることではあるが、それぞれの専門性を学生に還元することを目的としている面もあるため、能力の向上は個人的な研究活動に依存している状況であるともいえる。授業力・授業改善は初等・中等教育問わず教育全体においても課題であるが、

そのような中で、昨今の高等教育では、FD(ファカルティ・ディベロップメント)の機会が増えてきた。その背景として、以下のような理由がある。

「なぜ大学において FD が求められるようになってきたのだろうか。かつての大学の授業は、授業内容・形態ともに担当教員の裁量に任されていた。しかし、一部には「毎年同じ内容の授業を行っている」「板書だけの一方通行の講義形式で興味が持てない」といった批判の声もあった。そこで、授業の在り方を個々の教員に完全に委ねるのではなく、学内で組織的に検証し、課題がある場合は改善を促す仕組みを構築することが必要と考えられるようになってきたのである。」(『Guideline2014 年特別号』より引用)

そして現在、教育界、特に大学教育では AL(アクティブ・ラーニング)の実践が求められている。これは裏を返せば大学教育にはこの力が欠けているからこそ求められているとも捉

えることができよう。

しかしながら、大学教育とひとくりに考えることは難儀である。それぞれの分野専攻で授業の特色は異なる。実験を中心とした専攻もあれば、座学を中心とした学科もあろう。保育に関していえば、授業は実習・演習の割合が他の分野専攻と比較しても高い現状がある。

保育は現在多くの課題を抱えている。子どもの生活は変化し、子どもの育ちにおいて様々な課題を抱えている。それら克服のためにもよりよい保育が望まれており、そしてそれを実践する、よりよい保育者の育成が求められている。ゆえに、大学教育と一括りするのではなく、分野の特性を考慮し、それぞれの分野ごとの授業の特性に関する研究が必要であろうが、先行研究ではどのようにになっているだろうか。

「授業」は、主に質的研究によって研究されることが多く、また、昨今ではテキストマイニングを使用した研究も多い。保育科の授業に関する分析・検討の先行研究に関して、Cinii Articles 及び J-stage で「保育 テキストマイニング」で検索した。西山(2021)が保育内容の環境に関して、高畑(2021)は保育内容の人間関係に関して、小野(2021)や田村(2017)は保育者養成におけるスポーツ科目に関する授業分析の研究を報告している。このように、一つの授業に対象を絞った研究は存在したが、「保育者養成校」という規模に視野を広げ、授業の特性を明らかにすることを志向した研究報告は、筆者が調査した限りでは見受けられなかった。

加えて、保育士養成校は、多くの学生が入学当初から保育士を目指して入学してくることが多い。保育士養成校も含め、それぞれの学校、学科、専攻ごとに学生の属性は異なる。そのため、一部の授業のみならず、「保育士養成校」と視野を広げ、学校全体の授業分析も求められてくるのではないだろうか。

よりよい保育者育成の観点から見ても、保育における授業の分析は有用なものとなり得よう。そこで本研究では、よりよい保育者育成のため、また保育者養成校の授業の質の向上のためにも、保育に関わる授業の分析を行う。具体的には、専門学校を学生を対象に、授業全体の感想を収集し、授業の特徴を明らかにする。

方法

(1) 調査対象者・方法

A保育士養成校の保育科を対象とした。33 の授業を対象と

した。学生数は80名であった。それぞれの授業で、無記名で授業全体の感想を書くよう説明し、同意者のみ回答を収集した。

対象は以下の33授業である。講義終了後に、授業全体に関する感想を得た。対象授業は以下の通りである。なお、倫理配慮の観点から授業名称は一部変更する。

語学に関する教科1科目「英語」

音楽に関する教科4科目「音楽」等

社会福祉に関する教科4科目「社会的養護」等

保育・幼児教育に関わる教科12科目「教育課程論」等

その他学校独自教科12科目

これらの感想は、無記名・自由記述である。この授業感想の執筆は自由としたうえで書いてもらうよう示している。具体的には、「この授業の内容や方法について、よかった点や改善してほしい点を、自由に書いて下さい。」と問うた。

得た全ての回答は、それぞれ Microsoft Word に文字おこしをした。その後、それらをテキストマイニング、および形態素解析を行った。

(2) 分析方法

33 授業で授業全体の感想を収集し、テキスト解析を行った。具体的には、User Local 社のテキストマイニングを使用した。「授業」というワードがどのワードと共起しているかを確認した。共起された順の上位10%を有意水準として採択することとした。

(3) 倫理的配慮

研究調査実施においては、研究倫理に十分配慮を行ったうえで実施している。なお、個人情報の保護のため、無記名で回答させている。

結果

33 授業で授業全体の感想を収集し、それらをデータ文書に起こし、テキストマイニング及び形態素解析を行った。総文字数は19275字であった。

まず、テキストマイニングの結果、102組が共起していた。その102組の中で、単語ペアが適正ではない不要な組を筆者判断で抽出し除外した。その結果、97組となった。

表1 「授業」と共起した単語とその共起回数

	単語ペア		共起回数		単語ペア		共起回数
1	やすい	授業	28	26	勉強	授業	4
2	授業	楽しい	26	27	プリント	授業	4
3	できる	授業	23	28	授業	教科書	4
4	先生	授業	20	29	授業	言う	4
5	くれる	授業	18	30	授業	生徒	4
6	分かる	授業	13	31	ほしい	授業	4
7	授業	毎回	9	32	いく	授業	3
8	多い	授業	8	33	実習	授業	3
9	思う	授業	12	34	保育	授業	3
10	授業	知る	7	35	すごい	授業	3
11	感じる	授業	7	36	役に立つ	授業	3
12	授業	進む	6	37	丁寧	授業	3
13	授業	聞く	6	38	保育者	授業	3
14	授業	読む	5	39	授業	話す	3
15	授業	教える	5	40	実践	授業	3
16	くださる	授業	5	41	授業	面白い	3
17	授業	考える	5	42	授業	知識	3
18	学ぶ	授業	5	43	授業	良い	3
19	内容	授業	5	44	授業	進める	3
20	なかった	授業	5	45	取り組める	授業	3
21	子供	授業	5	46	授業	質問	3
22	大変	授業	4	47	授業	理解	3
23	お話	授業	4	48	授業	現場	3
24	参加	授業	4	49	授業	話し方	3
25	にくい	授業	4	50	実体験	授業	3

から話す」、もしくは「先生の話聞いてから、学生は話しをする」という、解釈の幅が広い結果もある。また、「聞き取る」から「声」までのセットもまた解釈が難しく、「聞き取る」「にくい」「づらい」に「板書」がかかっている点も改めて検討が必要であろう。

また、これらをクラスターごとに分類すると、表の上段から「説明、わかる、授業」で「Factor1」とし、これを「授業クラスター」と名付けた。次に、「考える、感じる、内容、いい、すごい、知る、教科書、勉強、テスト、多い、丁寧、教える」で「Factor2」とし、これを「教授と方法クラスター」と名付けた。また、「聞く、先生、話す」を「Factor3」とし、これを「教諭クラスター」とした。続いて、「黒板、書く、ほしい」で「Factor4」とし、「黒板クラスター」とした。「聞き取る、にくい、づらい、板書」を「Factor5」とし、「板書クラスター」名付けた。

以上、テキストマイニングの結果である。ただし、この結果はあくまでもテキスト分析であり、心理学的に確かめられたものではなく、様々な研究法での検討が必要であろう。

次に、形態素解析を行った結果、名詞、動詞、形容詞で以下の10語があがった。上位10語をそれぞれ名詞、動詞、形容詞からそれぞれ採用した。

名詞では、①「授業」、②「先生」、③「板書」、④「説明」、⑤「テスト」、⑥「教科書」、⑦「黒板」、⑧「子供」、⑨「内容」、⑩「丁寧」の10語であった。

動詞では、①「くれる」、②「できる」、③「思う」、④「分かる」、

⑤「教える」、⑥「書く」、⑦「聞く」、⑧「話す」、⑨「言う」、⑩「知る」の10語であった。

形容詞では、①「やすい」、②「よい」、③「ほしい」、④「楽しい」、⑤「づらい」、⑥「多い」、⑦「にくい」、⑧「すごい」、⑨「早い」、⑩「大きい」の10語であった。

なお、「知れるー知る」、「聞くーきける」、「くれるーくださる」、「知るー知れる」、「楽しいーたのしい」、「優しいーやさしい」、「早いーはやい」は一つの単語に統合した。また、名詞に「もう少し」という単語が含まれていたが、名詞ではないため削除した。

考察

以上、本研究では保育士養成校各33授業を対象に、収集した授業の感想を分析した。分析方法はテキスト分析の一つであるテキストマイニングを行った。

上記の結果に関し、保育士養成校の授業の特性には、まず「アクセス性」があると考えられる。単語頻出度、共起回数を概観しても、「やすい」「くれる」「ほしい」「わかる」などの単語が上位に挙がっている。これらは授業への参加のしやすさ、そして授業内容の理解のしやすさを示していると考えられる。教材の使いやすさ、授業の受けやすさといったもの同様であろう。すなわち、参加・理解の点のアクセス性を高めるための環境を構成することが重要なのではないかと考える。その他、授

表2 名詞・動詞・形容詞における単語の各出現回数

	■名詞	出現頻度	■動詞	出現頻度	■形容詞	出現頻度
1	授業	130	くれる	132	やすい	137
2	先生	64	できる	79	よい	136
3	板書	41	思う	68	ほしい	56
4	説明	30	分かる	54	楽しい	54
5	テスト	27	教える	47	づらい	35
6	教科書	25	知る	47	多い	31
7	黒板	23	聞く	39	にくい	20
8	子供	18	書く	35	すごい	18
9	内容	18	話す	29	早い	25
10	丁寧	17	言う	24	大きい	17
11	プリント	16	聞き取る	20	小さい	16
12	なかった	16	考える	18	眠い	16
13	生徒	16	感じる	18	良い	15
14	勉強	16	すぎる	16	見やすい	12
15	実践	15	学ぶ	15	面白い	11
16	実習	14	見る	15	やさしい	11
17	毎回	14	役に立つ	14	嬉しい	10
18	現場	14	出る	13	細かい	8
19	意見	13	進む	12	難しい	7
20	理解	13	使う	12	詳しい	5
21	保育	13	読む	11	うるさい	4
22	指導	12	とる	10	悪い	4
23	※1	12	受ける	10	遅い	4
24	ノート	12	終わる	9	深い	3
25	事例	12	学べる	9	長い	3

注)「知れるー知る」、「聞くーきける」、「くれるーくださる」、「知るー知れる」、「楽しいーたのしい」、「優しいーやさしい」、「早いーはやい」は一つの単語に統合した。また、名詞に「もう少し」という単語が含まれていたが、名詞ではないため削除した。なお、「※1」は不適切な表現であったため削除した。

業や教材に夢中になれ、自己効力感を感じられるような体験・経験が授業に関わっていると考えられる。自分自身が行き届き、達成感や自己選択できる環境が望まれよう。

「授業」との共起回数をさらにみてみると、4番目に「先生」があがった。これは、授業においては「先生」すなわち「教員」がいるという当然のことを指す一方、授業のよしあしは教師の人間性や技量も関わっていることが示唆されたのではないかと考える。5番目に「くれる」があがった。これは学生の授業を受ける際の自由度を示しているのではないかと考える。6番目に「分かる」があがった。これは、そのコンテンツを理解できるようにすることの必要性が表れたためだと考える。7番目に「毎回」があがった。これは授業の一貫性を意味しているのではないかと考える。8番目に「多い」があがった。これはコンテンツの量ではなく、使用するものや提出物、種類なども含まれよう。9番目に「思う」があがった。これは自分自身で考察できる環境の必要性が示されたのではないかと考える。

課題として、これは授業の感想をもとに分析したものである。感想という性質的に、文脈の前後も関連することは明らかであ

り、あくまでも参考にとどまる結果となったといえよう。

また、日本語の性質的に五段活用等で単語の語尾が変化することや(思う、思える、等)、別の言い方(よい、いい、等)で、それぞれ同じ意味合いでも異なるものとしてカウントされてしまうこともある。出来る限り除外もしくは同カウントとして扱ったが、ツールだけに頼ることは極めて危険な手法でもあるといえる。テキストマイニングという手法としての課題でもあるが、いかにオリジナルを担保し文脈を残しつつ表現を修正するかは課題として残っている。

また、保育科における授業である以上、他の学科専攻の授業では同じ結果になるとは限らない。学生の属性によっても変化しうる。そのうえ1年生、2年生の感想である。4年生大学でも同様の手法で調査してみると、より精度の増す結果となるだろう。

加えて本研究では、上記に示したように感想という形で回答を求めている。感想という形であると、感じたこと、考えたこと、気になったこと、よかったことを書くのが一般的であろう。このように感想という解釈の幅が広く、様々な回答が寄せられ

る。回答を「感想」という形式で問うのではなく、具体的に「このような面ではどうだったか」と違う形で回答を求めれば、また異なる結果がでることも考えられる。この点も検討の余地があることは否めないだろう。

また、本稿では保育士養成校全体の授業の特性を明らかにしたものであるため、保育士養成教育課程の授業だけではない。学校独自開講の講義も対象としているため、他校においても同様な結果になるとは限らない。

その属性を定めるにあたっては様々な検討が必要になるだろう。保育士養成課程の授業のみか、保育士養成校の授業全てか様々である。短大と4年生大学でも異なるであろうし、幼稚園教諭免許状取得に関わる科目であれば大学院生も考えられるため、保育・幼児教育に関わる科目をとっているといえども属性の幅は広い。

ただし、テキストマイニングは確かに単語との距離感を示す有効な分析であることも本研究で明らかになった。この結果を基に、量的に示せるリッカート尺度開発にもつながるのではないだろうか。

謝辞

本研究にご協力くださいました皆様におきまして、改めて感謝申し上げます。お忙しい中ご対応いただきまして、誠にありがとうございました。

参考文献

- 河合塾 Kei-Net (2014)『Guideline2014 年特別号』「Part.4 大学教員の教育力向上」.
https://www.keinet.ne.jp/magazine/guideline/backnumber/14/s/14_s_part4.pdf, 2021年10月30日取得.
- 西山修(2021). 保育内容「環境」の授業前において保育者志望学生が抱く環境概念の特徴. 岡山大学教師教育開発センター紀要 (11), 1-13.
- 高畑芳美(2021). 法令の改定に伴う保育内容「人間関係」の研究動向. 梅花女子大学心理こども学部紀要, 11, 1-9.
- 小野隆(2021). 保育者養成における「スポーツと健康」科目と授業のルーブリックをもとにした評価 —授業振り返りコメントのテキストマイニング分析を参考にして—. 名古屋柳城女子大学研究紀要 (1), 71-78.